

発表・報告要旨

(1) 一般研究発表

吉田全宏「関西地方 在日コリアン寺院の変容について <日本化>の視点から」

本報告では、在日コリアン寺院の中でも特に巫俗を実践する在日コリアン寺院を取り上げ、それらの寺院の変容について「日本化」の視点から考察しようとするものである。

そもそも、在日コリアン寺院は古くは朝鮮寺と呼ばれ、戦前から関西を中心に存在していたが、その存在が広く知られるようになったのは1985年の「宗教社会学の会」による生駒地域の悉皆調査以降である。その後、在日コリアン寺院に関する研究には多数の蓄積がみられるが、先行研究の多くは当時の宗教的職能者や依頼者に焦点を絞ったものであり、当事者たる在日コリアンが日本の地で行う巫俗実践の解明に主眼が置かれていることが理解できよう。

筆者は生駒山麓周辺を中心として関西の様々な在日コリアン寺院でフィールドワークを行い、宗教的職能者や依頼者への聞き取り、および儀礼の参与観察を行ってきたが、その過程でそれらの寺院の宗教的職能者や依頼者の中には韓国・朝鮮との関係の希薄な日本人が一定数存在していることを見出した。この事実は、在日コリアン寺院が日本で活動していくなかで、旧来、在日コリアンを対象としていた巫俗信仰が幅広く日本社会の中に拡散し、変容していることを意味するものと思われる。

また、かつて朝鮮寺という呼称に対する議論が起り、現在では朝鮮寺を含む総称として在日コリアン寺院と呼ばれるようになってきたが、それは時代の変化とともに呼称と実態のズレが生じた結果だともいえよう。そして、その変化の中には、現在活動している巫俗を実践する在日コリアン寺院と宗教的職能者および依頼者たちの変容（つまり、「日本化」）にも注目すべき必要があると考える。

本報告ではこの変化を踏まえた上で、日本人宗教的職能者や新しく在日コリアン寺院に通うことになった日本人依頼者に注目し、彼らの信仰世界がいかなるものであるかを、ライフヒストリーやインタビューから明らかにしながら、その変化の意味するものについて論じたい。

文聖姫「北朝鮮における経済改革・開放政策と市場化—2008年、2010～2012年の現地調査を中心に—」

旧ソ連や東欧、中国などの旧・現社会主義国における計画経済から市場経済への移行はしばしば、計画経済と市場化の共存から、計画経済を放棄して市場経済へ移行し最終的には移行を完成させるという市場経済移行論の観点から論じられてきた。

しかし、果たして計画経済と市場化の共存を経た後には市場経済化に移行するという答えしかないのか。国家の計画経済政策と「下からの市場化」が共存する北朝鮮における現状をどのように説明すれば良いのか。このような前提に立てば、①計画経済と市場化は果たして共存するのか、②北朝鮮において部分的に市場化を導入するとどうなるのか、③計画経済と市場化が共存している状態では何が問題なのか、④北朝鮮当局は果たして市場経済化を志向しているのか——といった問いが設定できると考える。

このような問いを前提として、本発表ではまず、北朝鮮における国内経済政策と対外経済政策を経済改革・開放政策を中心に概観する。ここで北朝鮮の経済政策を概観する目的は、北朝鮮当局がどのような政策を、どのような目的で実施しているのかを整理することによって、経済政策に対する北朝鮮の自己認識を探ることにある。ここでは、発表者が2010年と2011年に平壤で北朝鮮の経済研究者から受けた講義内容を資料として使用する。

第2に、北朝鮮における経済活動の実態を考察する。ここでは発表者が2008年、2010～2012年に行った現地調査で集めた資料を使う。時期を限定する理由は、経済活動の実態を考察するといっても、その時々で変化するものであり、建国以来の長期間にわたる経済の実態を俯瞰することは不可能であると思われるからだ。そのため、一定期間に限定した経済活動の実態について、①国営工場・企業所、②国営商店、③市場化の現状に分けて述べる。

そのうえで、北朝鮮当局の経済政策と現地調査の内容を比較することによって、北朝鮮経済の現状について分析しようというのが本発表の試みである。

なお、発表者は2012年以降、北朝鮮を訪れていない。そのため、金正恩時代になってからの具体的な動きについては、資料等で若干把握している程度であることから、必ずしも北朝鮮の今の状況を的確に分析できているものではないことをお断りしておきたい。

安田昌史「西陣織産業における在日コリアン—労働・民族的アイデンティティを中心に—」

本発表では京都の西陣織産業に従事した在日コリアンの経営者・労働者の労働に関する習慣と実践、および彼らの民族的アイデンティティについて、インタビューや個人の記録などの資料を基に事例研究をおこなうものである。

本研究の事例によれば、在日コリアン1世の渡日の背景には、植民地朝鮮の故郷での生活の困窮化という問題が存在していたと同時に、内地への憧れを持って日本へ渡ってくる者もいた。

西陣織産業へ参入するとき、職業の選択肢が大幅に制限されていた在日コリアンは「生きるため」にこの産業を選択するようになった。本研究の事例では、同じ在日コリアンの知人や親戚の斡旋で同産業に就労した者が多い。

西陣織産業に関する技術の習得について、在日コリアンはやはり「生きるため」に技術を必死に獲得した。この技術の習得局面では、日本人と在日コリアンとの間で大きな差異は見られない。このように西陣織産業を見たとき、この産業内で在日コリアンと日本人との間では分業・住み分け(segregation)のような現象は見られず、両者の関係は互いに競争し合うものに近かったと考えることができる。

1950年代から60年代中盤まで西陣織産業が成長した時期において、経営規模の大きい在日コリアン1世の経営者の「大きく成功した」という逸話が、彼らの息子や孫が書いた資料から見られた。しかし零細な経営者や労働者の場合、そうした「成功例」ともいえる記述やエピソードを得ることはできなかった。

1960年中盤以降、西陣織産業の衰退する中では、経営規模の大きい在日コリアン経営者の場合、不動産産業やパチンコ産業に転業する者が存在した。一方、西陣織産業の衰退期にこの産業から転業することができなかった零細な経営者や労働者も存在した。このように一定規模以上の経営者と零細な経営者や工場労働者とでは、西陣織産業からの脱出形態

が異なるといえる。

そして西陣織産業の中で表出される在日コリアンとしての民族的アイデンティティは、各自様々な形態で見られた。在日コリアン1世の場合、祖国建設のために故郷の経済や社会再建に尽力する者が存在すると同時に、西陣織産業の中で在日コリアンの組合や民族金融機関の設立の試みなどのように、日本での生活基盤の獲得に尽力するという動きが存在した。その一方、ある在日コリアン2世の女性は西陣織工場で就労する中で自身が「日本人扱い」を受けることに違和感を覚え、この違和感が「日本人」ではなく「在日コリアン2世」としての民族的アイデンティティを再構成する出発点にもなっていた。

最後に、西陣織産業の中で在日コリアンは自身の働くこの産業に対して、各個人が多様な感情を持っていた。ある者はこの産業で働くことに誇りを持ち、ある者はこの産業での労働は「生活の手段」と割り切って働いてきたと語る。そうした違いのなかで共通的に見られたのは、彼らが「生きるため」にこの産業の中で必死に働いてきたという認識であった。

(2) シンポジウム「韓国朝鮮社会における記録／記憶の諸相」

六反田豊「趣旨」

韓国朝鮮の伝統社会において、人々は日々の営みや思いをどのような手段・方法によって記録し、記憶してきたのだろうか。またそこにはどのような特徴がみられるのだろうか。

金属活字印刷や書籍刊行などに代表されるように、古来、韓国朝鮮社会が高度な文字文化を発達させてきたことはあらためて述べるまでもない。為政者や知識人など社会の上層を形成した識字層の人々は、文字を縦横に駆使しつつ、国政の円滑な運営・処理を図るとともに多様な芸術作品を生み出してきた。現在、われわれはそのような過去の人々の営みや思いを、まさにそれらが文字によって書写されているがゆえに、その限りにおいて知ることができる。文字が持つさまざまな機能のうちとくに「記録する」という機能のおかげで、彼らがそう意図したか否かにかかわらず、過去の記憶が今日まで伝えられてきたのである。

むしろ、文字だけが人々の営みや思いを記録／記憶する手段だったわけではない。文字以外にもさまざまな手段によって記録が作られ、過去の事実が記憶されてきたことも忘れるわけにはいかない。たとえばその一つとして絵画をあげることができる。近年その歴史資料としての価値が注目されている各種の『儀軌』に収録された「班次図」などの図版類はもちろん、その他の記録画や絵地図類、あるいは風俗画や民画に至るまで、現存する多様な絵画資料もまた過去の記憶を今日に伝える重要な記録の一種にほかならない。

ただし文字にせよ絵画にせよ、前近代にあつてはいずれも社会の上層を形成するごく少数の人々がほぼ独占しており、大多数の庶民層は基本的にそれらとは無縁な生活空間に生きていた。しかしそれは、彼らが日々の営みや自らの思いを記録／記憶する術を持たなかったことを意味しない。文字や絵画などからは隔絶されていたとしても、庶民層はその一方で豊かな口碑・口承の世界を持っていた。口碑・口承は文字や絵画とはまた別の形での記録／記憶の一つのあり方である。

このように、人々は実にさまざまな手段で日々の営みや思いを記録／記憶してきた。本

シンポジウムではこの点を踏まえ、韓国朝鮮の伝統社会における記録／記憶の多様なあり方を、そのための手段という側面に注目しながら照射しようとするものである。

たとえば文字による記録／記憶の場合、韓国朝鮮の人々はどのような事柄を選択し、それを文字によって記録したのか、という問いを立てることが可能である。この問いは、あるいは文字によって記録／記憶するという行為は韓国朝鮮の人びとにとってどのような意味を持っていたのか、と言い換えることもできる。

あるいはこのような問いの立て方については、あまりにも漠然としすぎているとの批判もありえるだろう。しかし上述のように高度な文字文化を発達させてきたとはいえ、今日とは異なり文字が社会上層の人々にほぼ独占されており、しかも書写や印刷に用いる材料・労力の確保に大きな制約があった状況において、そもそも文字によって記録を残すことはそれ自体が限定的かつ選択的な行為だった点に留意すべきである。文字によって記録するという行為にはそれぞれの時代・社会の観念や価値観が一定程度反映されており、その意味で韓国朝鮮の伝統文化の一端をそこに垣間見ることができるものと考えられる。

絵画や口碑による記録／記憶の場合も、文字の場合と同様、これらの手段によって記録／記憶することが持つ意味は何か、またそこからどのような特徴が読み取れるのかという問いをまずは立てることが可能である。とくに絵画の場合には、その目的に応じて表現形式にどのような違いがみられるのかという点も重要な論点になりうるだろう。一方口碑については、それが文字による記録／記憶として定着していく過程も注目される。

ところで、文字や絵画などがおもに視覚を媒介として記憶を伝える記録であるとするれば、口碑は音声により聴覚を媒介として記憶を伝える記録であるということもできる。同様のものとしては音楽（歌や曲）もある。こうした各種記録の媒体としての違いに特に注目しつつ、それぞれの手段の特質を韓国朝鮮の社会や文化のあり方に即して考察していくことも興味深い課題となるだろう。

本シンポジウムが、韓国朝鮮における記録／記憶をめぐるさまざまな問題を考えるための材料を多少なりとも提供できれば幸いである。

川西裕也「朝鮮時代における文書の伝来と消失」

近年の韓国では、自らを伝統的な「記録の国」と見なす風潮がある。韓国のマスメディアや学術誌が、前近代の韓国朝鮮の記録文化を取りあげ、これを世界最大・最高水準のものとして高く評価する言説は、しばしば目にするところである。実際、『朝鮮王朝実録』や『直指心体要節』など、かつて韓国朝鮮で作成された各種の記録史料は、ユネスコの世界記憶遺産に多数登録されており、その登録件数はアジア諸国の中で突出している。このような現状において、韓国が「記録の国」と自らを位置づけるのも当然のことであるのかもしれない。

しかし、歴史学研究者の立場からすれば、こうした韓国の自己認識には、やや違和感を抱かざるを得ない。それというのも、前近代における韓国朝鮮の文書（帳簿や書き付けを含む広義の文書）の現存数が必ずしも多いとはいえ、当時の歴史を研究する上で大きな障碍となっているためである。統一新羅（7～10世紀）以前の現存文書は皆無に近く、高麗（10～14世紀）や朝鮮前期（14～16世紀）の文書もまた数が少ない。現存する文書のうち、大半は朝鮮後期（17～19世紀）のものである。ただ、朝鮮後期の文書であっても、国

王に関わる文書や中央官庁の行政関連文書、士大夫の権利・財産関連文書や家門の由緒に関わる文書はそれなりに数があるが、それ以外の文書の現存数は限定されている。

もちろん、前近代の韓国朝鮮において、文書が使われていなかったというわけではない。少なくとも朝鮮時代には、王朝政府でも民間でも盛んに文書が作成されるようになっていたことは明らかである。それでは、現在の韓国朝鮮では、膨大にあったはずの文書の大半がなぜ消失してしまったのであろうか。この問いに答えるためには、文書の「伝来論的研究」を進める必要がある。伝来論的研究とは、文書が生産されて今日まで伝存するにいたった経緯や要因、あるいは過去の各時代における文書の管理制度や保管実態（保管の方法・形態・場所）などについて考察する研究をいう。しかし、こうした研究はまだ緒に就いたばかりで、成果がほとんど蓄積されていないのが現状である。

本発表では、文書の伝来論的研究の一環として、朝鮮時代において文書がいかに廃棄されていたのかを分析する。その結果を踏まえて、文書の消失の要因について考えてみたい。

中尾道子「朝鮮絵画における記憶のかたち—雅集の場の再現とその絵画化をめぐる—」

東アジアの伝統社会では、文字による記録のみならず、記憶を共有し、つなぐメディアとして画像を介した情報の伝達や交換が行われてきた。また、詩文や書といった文字情報と絵画作品をしばしば一体のものとして享受していた。早くから中国の画論に拠り所を置いた朝鮮においても、詩書画一致は極めて重要な課題として考えられていた。

朝鮮王朝初期には、安平大君が桃源に遊んだ夢を凶画署画員の任にあった安堅に命じて僅か3日で絵画化し、大君自身が跋文を記し、その近臣たちが詩文を唱和した画卷「夢遊桃源図」（1447年、天理大学附属天理図書館）が制作される。この画卷は、まさに詩書画の応酬という北宋に隆盛した文人知己同士による制作環境が、元・明の実践と理論によって体系づけられ、東アジア世界において普遍化していく中で創造された作例の一つである。

こうした伝統の上に、詩書画のコラボレーションが形式面において朝鮮化したのが契会図であり、添えられた詩文や座目といった文字情報から、特定の場所での実在の人物による会合という現実の出来事を前提に描かれたものであることが確認できる。とくに16世紀半ば以降の契会図には人々が集う宴の場面が詳細に描かれて、それまでの山水主体の図像とは異なり、参会者の数や座次までもが忠実に描出された記録画的要素が強い作例が出現する。しかし一方で、これらの作例からは、実在の宴を絵画化するに当たり中国の故事に倣おうとする別の側面も垣間見える。

知己同士の雅集の場で制作され、鑑賞され、交換された絵画は、さまざまなバリエーションで展開するが、18世紀半ば以降、それまで専ら作画の担い手であった画家が、自らを像主とする、つまり、画家自らを含む雅集の場を描いたものが見られるようになる。附された題跋や賛詩によってその存在が認められる一連の絵画は、根本には、会合が持たれた場所や時節、参会者の特徴的な行動や服装、調度などを再現するといった動機が認められるものの、画には描かれるべき出来事を演出するもう一つの側面、すなわち、故事や古典、過去の有名な会合に裏打ちされた類型化や理想化がなされていた状況がひそんでいる。

これらの事例は、現実と虚構の交錯、フィクションとノンフィクションの往還の関係を孕んでおり、描かれた内容の事実関係やその客観性が先ずもって問われる「記録」とは明瞭な一線を画すものである。

記憶する視覚のメディアとしての在り方は、絵画に与えられた社会的な役割の一つであるといつてよい。絵画がその役割を果たそうとするとき、どのようなメカニズムが働き、またどのような特質を見せるのであろうか。本報告では、朝鮮絵画における記憶のかたちの展開を、文人知己同士の雅集という伝統的な主題の中にたどって見たい。

崔在佑「韓国口碑文学における記録の諸様相」

口碑文学とは、音声言語を媒介に代々伝わる芸術を指す。従って、口碑文学と記録にそれほど深い関係はないと思われがちである。しかし、実状はその反対に近いといえよう。口碑文学は、流れが途絶えやすい上に、伝承が途絶えた口碑文学が記録されていない場合は、その存在自体が無意味になるからである。

はじめに、韓国の口碑文学における記録の様相を簡単に紹介する。まず、‘漢字・郷札・国漢文混用・純国文’が口碑文学の記録に使われていることを順番にみせる。続いて、記録過程で記録主体が介入する程度に注目し、記録主体の介入とその産物の内容の変化を基準に、‘採録、記載、改作’に分けられることについて言及する。

次は、主に改作された作品によく見られる問題点に目をつけ、代表的な二つの作品を挙げてパンソリが記録されるときの功罪を探ってみる。まず、申在孝の改作作品を対象に、彼がパンソリ史で絶対的な存在として評価されていることを功として認めたい。彼の唱本は、記録主体が過度に介入した象徴でもあることを罪として紹介する。個人の意図的な改作が、慣れてきた唱本の雰囲気とは違うものを作り出し、結果的にパンソリ唱者達の支持を受けられない作品を生んでしまう。それ故に、彼の改作作品は、パンソリ唱本ではなく、記録物として後代に伝えるしかないという悲運に直面する結果となる。

最後に、「晩華本春香歌」を挙げ、口碑文学が記録される過程で起こりうる‘記録の罪’について考えてみる。これは、現存する記録が事実関係をどのように乱すのかについての問題提起でもある。「晩華本春香歌」は、‘春香伝’の最初の作品として認定されてきた。しかし、作品が含まれている『晩華集』の実態には疑問がある。今残っている二つの『晩華集』異本共に、学術的に検討されていない状況と下の分析結果をもとに、この作品に最初という大切な意義を付与してもよいかについて、粗略ではあるが、指摘する。

続いて、「晩華本春香歌」を分析し、上の疑問をもう少し明確にしてみる。‘春香伝’は、核心挿話の違いにより、大きく三つの系列に分けられる。全羅道中心の別春香傳系、ソウル中心の南原古詞系、活字本中心の獄中花系がそれである。従って、「晩華本春香歌」は、‘全羅道を旅して来て作った’という根拠記録を考えると、別春香傳系というしかない。しかし、‘春香の身分・不忘记の存在・科挙試験の種類’の三つの内容をもとに分析してみると、この作品が別春香傳系ではなく、南原古詞系に近いことがわかる。

当初から柳振漢が記録した別春香傳系のものがあつたには違いないと思われる。それに後裔の誰かが、後代の南原古詞系も参考に手を加え、今残っている作品を作り出したと思うのが自然であろう。このことからみると、本発表は、記録主体の介入がもたらさうる弊害についての積極的な問題提起の一環でもあるといえよう。